
変態インキュバスに憂鬱

宮座頭数騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態インキュバスに憂鬱

【Nコード】

N2178C

【作者名】

宮座頭数騎

【あらすじ】

妖狐最上級クラス“天狐”の玉藻烈狐丸は、知り合いの妖狐の青年式部彩を連れて山のキャンプ場に川釣りへ来ていたのだが、ある性の悪魔インキュバスの乱入により予想外なハプニングが起きるのだった。今回はコメディーをより強めた烈狐丸シリーズ第五弾。毎回一話完結。初めての方でも読めますのでどうぞ、お楽しみ下さい。

（前書き）

この作品は、テーマ小説変小説の提出作品です。他の作家さんたちの作品はより面白い作品でいっぱいです。是非読みになられて下さい。

木や草が生い茂る深緑の森。

それに入り交じる少し大きめのごつごつした灰色の岩石。

太陽に照らされ、きらきら輝く少し笠が深い緩やかに流れる澄んだ川。

その川の流れに逆らい浮いているウキはびくびくと上下に沈み、浮かび上がる。

そして――。

「フイーシュッ！」

オイラは高らかに声を上げて、釣り竿を引つ張り上げる。激しい水しぶきが飛び、川から大きな魚は釣り上げられて弧を描くように空を舞う。

「やったっすー！ 四匹目ゲットっ！」

喜びの声を上げながらオイラは、釣り上げた魚をクーラーボックスに入れた。

オイラの名前は玉藻烈狐丸。たまもれつこまる

妖狐の最上級クラス“天狐”と呼ばれる善狐「善狐とは、人から見て害をくわえない良い妖狐のこと」である。

オイラは今、山の河辺のキャンプ場で川釣りをしている。

実はオイラは、訳あって人間の少年の姿に化けて都会で暮らしていたのだが、最近は自然が恋しくなり……てまではいけないけど、久しぶりに自然の空気を吸いたいと言うわけでここに気分を満喫するために来たのだった。

「烈狐丸様、魚を釣り上げるのは構いませんが、ちゃんと川に帰してあげて下さいよ」

さい 後ろで岩に腰掛けている連れの上級クラス妖狐、“白狐”の式部しきぶ

彩がしかめつつらでオイラに告げる。

「判ってるっすよ彩、キャッチ&リリースっす。今日は何匹釣れるか頑張ってるんす」

「……そうですかあ」

「ん？ どうしたんすか彩。元気ないっすね」

やる気の無い声を出す彩にオイラが尋ねると、彩は深い溜息を漏らした。

「……今日は私の正式な上級クラス白狐への位置付けが決定したと言う祝いの為に、このキャンプ場へ釣りに来たんですよ？」

「そうっすよ、白狐なのに若いから中級の上クラスって言われていた彩も今日でようやく上級の位置付けになるから、祝いとしてここに遊びに来たんすよ」

浮かない顔で尋ね返す彩にオイラは笑顔で答ながら釣り竿を振るう。

「……そのわりには、祝って上げると言ったのは烈狐丸様だけで、知り合いや妹の楓など全く無関心。そんでもって烈狐丸様は一人で私の釣り竿を使って釣りを楽しんで、私はボケっつと烈狐丸様の釣りを楽しむ姿を眺めているだけ……」

彩は愚痴るように言いながら、不機嫌そうな表情でオイラを見据えていた。

—— いったいどうしてだろうか？ って考えたら原因はオイラだ。今日はオイラじゃなく彩が満喫する日なんだよ。つい釣りに夢中になりすぎて、それを忘れてた。

「あ、彩も釣りをやりたいんすか？ ごめんっす彩。彩の釣り竿なのに、はいっ」

「へっ？」

優しげにオイラは釣り竿を彩に渡そうと差し出した。

意外に思ったのか彩は少しだけほづけた表情だったが、やがてそれは穏やかになり――。

「――ありがとうございます」

お礼を言つて竿を受け取つた。

暫くして――。

「あ！ 彩、魚が掛かったみたいっす！」

「わかつてますよ！ ふんっ！」

彩は頑張つて竿を引くのだが――。

「あっ！」

「い、糸が切れちゃつたっす……」

実は川の奥深くの石に引っ掛かつていたらしく、それを知らず無駄に力を入れた為に糸は切れてしまい、釣りは終了となつた。

結局、呆気ない終わり方だったが、彩の表情はどこか楽しそうだった。

「……烈狐丸様。今日はありがとうございます」

釣つた魚をクーラーボックスから出して川に帰しながら、彩はオイラにまたお礼を言つた。ただ、その感謝の意味はオイラが竿を渡してくれたのとは全く違うようだった。

「……彩？」

「……」

いつも真面目面で不機嫌そうな態度を見せる彩が、この時は不思議なくらい微笑んでいたことにオイラは驚いてしまった。

「ど、どうしたんすか急に？」

――なんか気持ち悪いよ、彩がそんな顔するなんて。

なんて失礼には思いながらもオイラは彩に尋ねてみた。

「烈狐丸様。――私は、どうにも人に嫌われやすい性格と言つか……。他者との付き合いが下手くそで、妹の楓や皆に嫌な目で見られていました……」

――うん、知っている。

「今回の里の妖狐達に私が白狐に正式に認めてもらえた時も、皆私を当然そうに見て無関心でした」

――そりゃそうだ。彩は幼い内から他の妖狐よりずば抜けた能力

と才能を持っていた。白狐になったのが早いのもそれによるものだから、皆は彩を特別視していた。彩本人もいつの間にかエリート意識が生まれた事があってからか、皆への態度は素っ気ないものだった。

——だけどオイラは知っている。彩は本当は見栄を張って強がっているだけで、孤独を感じながらもそれに耐えている、まだ脆い純粹な精神の若い妖狐なんだと。

実際オイラが釣りに行こう何て言い出したのは、その日の彩がどこか淋しげな様子なのが、なんだか放っておけなかったからだ。

「烈狐丸様——あなたは昔から私に構ってくれてますよね。……今日だって突然釣りに行こう何て言ったのは、私の事を気遣かったことでしょう……だから、感謝してます。今日のことは」

流れる川を眺めながら浸り顔で彩は話を続ける。

「私は、あなただけは認めているんです。私の気持ちをよく理解してくれているあなただけは誰よりも……。だから、これからもよろしく願います烈狐丸様」

語り終えた彩は、眺めていた川からオイラに視線を替えると優しく微笑んだ。

妖狐の里や都会では彩が笑う姿は滅多に見ない、嫌、考えたら一度も見たことが無いかもしれない。この日、初めて彩の心の底からの笑顔をオイラは見たのだった。

それから川を眺めながら歩いていると――。

「んっ？」

彩が立ち止まり、訝しげに遠くに眼を凝らしているのにオイラは気付いて声を掛けた。

「どうしたんすか、彩」

不審な様子で彩が見ている方にオイラも目を向ける。すると、同じくキャンプ場に来ている他の釣り人達が川釣りを楽しんでいる光

景が映るのだが、問題視するのは彼らがゴミを捨てたままにしているその行為だ。

マナーの悪い人間はよくいるものだが、そういう人間が原因で自然が汚れてしまうこともよくあることだ。そう思うとさすがにこれは放っておけない。

オイラが軽く注意しようとして一歩踏み出すが――。

「自然を汚す愚者どもめ……」

そうしようとした矢先、彩が炎弾発射体勢に入っているじゃないか。

「ちよつ！ 彩！ ストーツプすう！」

これはまずいと思いオイラは急ぎ彩を制止させた。

「な、どうしてですか！ あれはどうみてもゴミを捨てる人間達が悪いじゃないですか」

「いやいやいや、だからと言ってそれはやり過ぎつすから」

オイラは呆れながらも彩に先ずは口で注意しようと説得した。

「――そうですか、少し納得がいきませんが、先ずは口で注意しましょう。ですが、それで反省の色を彼らが見せなかつたら、撃ち込みます」

説得のすえ、不満げながらも彩はオイラの説得を聞き入れてくれたのだった。

――とはいえまったく、善狐にして彩は些細な事で人間を悪く見るところがあるのは悪い癖だ。少しは人間を信じてみても良いと思うんだけどなあ。

そう思いながら、オイラはタバコをポイ捨てしている釣り人達に歩み寄る。

「その人達、ゴミを捨てるのは自然を汚す原因に――」

オイラが注意しようとしたその瞬間。

「何しとんじゃワレエ！」

いきなり釣り人がゴミをポイ捨てした川から、片目に傷がある河童が現れたではないか。しかも河童は何故かヤクザ風な口調で、肩

にはキュウリを食べている河童の入れ墨が彫られている。

「ひ、ひいつ！」

当然驚く釣り人達に河童は――。

「ワレエ、川にえらい汚かつしいもん捨ておつてからに……。エ
ンコじゃあ済まされんぞゴラア！」

すんごく恐い形相と威圧感たつぷりの睨み付けで叫んだ。

「う、うわあああゝ！」

そのあまりの恐さに、震え上がった釣り人達は悲鳴を上げて逃げ
てしまった。

突然の予想外の出来事で、オイラと彩はただ啞然とその様子を観
ていたのだった。

「……ま、まあ事態は悪い方にはいかなかったすから、これはこ
れでよかったすかね……はは」

「……そ、そうですね」

苦笑いしながらオイラ達とその河童の行動を眺めていると――。

「ち、カスが！」

そう口にした河童は川に浮いたタバコを拾い、どこに所持してい
たのかライターを取り出して火を付けてタバコをふかし始めたでは
ないか。

「ぺっ！」

しかも唾を吐いた！ 何て柄の悪い河童だ。更には吸い終えたタ
バコをポイ捨て――。

「――って！ コラアー！」

「あー？ なんじゃいワレ」

「なんじゃいワレ、じゃないっすよ！ 川にゴミをポイ捨てるな
言っついて何してんすかあんだ！」

オイラはずかずか歩み寄りながら柄の悪い河童に指差しながら怒
鳴り付けた。

「知るかボケエ！ ワシのテリトリーで何しようが勝手じゃろが！」
「いやいや、川を汚すな言っただじゃないっすか。何汚しているんす

か！ 言ってる事とやっていることが全く違うじゃないっすか！」

「ワシに説教たれる気がワレ？ この河童の勇気様に？」

そう凄まじい形相で睨み据える河童の勇気は、次に口の中で何かをうがいのようにながら水を濯ぐ音を鳴らす。

「死にさらせー！ ププププッ！」

勇気は言い放つと口から水弾を連射で撃ちだしてきた。

「おわっ！」

飛んで来た水弾をオイラは右に、彩は左にへと避けた。

水弾は近くの岩に直撃して、軽自動車並の大きさはある岩は粉々に砕け散った。

—— 凄い破壊力だ。

そう思いながら間合いを取り、オイラと彩は身構える。

「ち…… いっちょ前に避けおつてからに、だがまあ、今のは威嚇じや。こっからマジでやっちゃる」

そう言つて勇気は身体から緑色の妖気を放つ。

「彩！」

「はい、判ってます」

オイラ達もこれはまずいと思い、身構えた姿勢を低くし紅色の妖気を放った。いわゆる戦闘体勢に入ったオイラ達は、鋭い眼光を懲らして勇気を見た。

「はっ！ やる気かワレエ」

緊迫した雰囲気がい、激しい攻防戦が起きるかと思ったオイラだったが、その予想はあっさりと破られた。

「れっくんにナニすんじゃゴラァー！」

「ぐはぁー！」

突如空から背中からコウモリの翼を展開させた金髪で碧眼（エメラルドブルーの眼）の男が、河童の勇気の後頭部に急降下を利用したキックを食らわせた。

それにより河童の勇気は頭の皿を割られて撃沈。少しして浮かび上がるとそのまま川に流されて行ってしまったのだった。

なんだか拍子抜けした結果になってしまったが、そんなことよりも、オイラにとっては今いきなり乱入してきた奴の方が問題である。「ハァイ、れっくん」

「く、くくクラウドス！ な、なななんでここにいるんすか！」

「烈狐丸様、知り合いですか？」

西洋妖怪、性の悪魔インキュバスのクラウドス。オイラが苦手とする変態。そう、奴はインキュバスのくせに男好き、俗に言うホモなのだ。

しかもあることがきっかけでオイラに一目惚れして以来、必要にオイラを追っかけて来るストーカーだ。

まさかここまで追っかけて来ていたとは……。

「つれないなあれっくん。僕も誘ってよー一人で行くより二人で一緒の方が、愛が深まるじゃないか」

「いや、違うっすから、今日は彩を祝う為に来たんすよ」

「ふふふ、わかってているよ。ここで今日は一夜をすごすんでしょ」

オイラは冷たく言い放つが、まるで聞いちゃいないクラウドス。いや、それどころか勝手な妄想を膨らませている。

——てゆーか、彩を眼中に入れるよ。何オイラだけ執拗に眼を愛らしく輝かせて見据えてるんだ気持ち悪い！

不快な気持ちをオイラは眼で訴えるのだが――。

「どうしたのれっくん。そんな激しく見つめられると僕興奮しちゃうよ」

逆効果だった。

何にしてもだ。一刻も早くクラウドスから逃げなければ。コイツといるのは正直別の意味で危険だ。

「あー！」

そうと決まれば早速オイラは空を指差しながら叫ぶ。

「えっ？」

——チャンス！

彩とクラウドが気になって空に視線を映す間に、オイラは森の奥に全速力で逃げ込んだ。

「——はあ、はあ。逃げ切ったつすかね？」

森の奥にまで逃げてきたオイラは、注意深く辺りを警戒し見回す。彩には悪いが、あの場ではああするしかなかった。都会で生活していた時は何度クラウドに襲われたことか。朝起きたら何故がアイツがいていきなり唇を近付けてきたり、後ろから不意を突くかのように抱き着いてこようともした。他にも数えたらキリがない。

——ゾッ！ 考えたらオイラよくこれだけの身の危険を回避できたよ。だいたい性の悪魔インキュバスは本来なら女性に愛情意識を向けるべきだろう。言っちゃ悪いがその点を考えるとアイツはインキュバスとしては変わり過ぎだ。いったい親はどんな育て方をしたんだろうか、いや、もしかしたら別のきっかけが原因で同性愛に目覚めたんだろうか？

どちらにせよだ。オイラにとってアイツが苦手で危険な存在であることには、まず間違いない。奴から逃げたのは正しい判断だとオイラは思う。嫌、正当化したい。

「——どうやら逃げ切ったみたいっすね」

——よかったよかった。

胸を撫で下ろしてオイラは一安心の溜息を漏らすのだが——。

「誰から逃げ切ったの？」

「そりゃあ、あのインキュ——、……ってギヤアアア！」

なんと、いつの間にかクラウドはオイラの後ろに立っていたのだ。

「そ、そんな馬鹿な！ オイラ全速力で逃げたのに！」

「フッフ、僕の脚力を甘く見ちゃいけないなあ」

これでもオイラは普段の力を抑えている人間の姿でも百メートルを三秒内で走り切れるくらい速いのに、クラウドは翼があるくせに

走って追い掛けて来たのか。お、恐るべき脚力だ。

「れっくんの為ならたとえ火の中水の中さ」

「そうっすかあ……」

——いい迷惑だよ、こんちきしょう！

「さて、もう鬼ごっこは終わりにして、僕の愛のキ・スを！　ウン」

——イイイイ！　気持ち悪い、唇近付けるなあ！

ばくえんしょう
「爆炎掌！」

「ゴファー！」

オイラは炎を纏った掌打と直撃後爆発を起こす近接打撃技、爆炎掌をクラウドスの顔面にぶち込んだ。

「ギャアアア！　アヂイイイイ！」

まともに食らったクラウドスは顔面を押さえながらごろごろ転がり回る。かなりグロい光景だが、力はかなり抑えて放ったし、クラウドスの再生能力は半端ないから大丈夫だろう。

「いい加減にするっすよクラウドス！　オイラは男と付き合う気はさらさら無いっす！」

オイラはそう言い捨てるとクラウドスを放ってキャンプ場に帰ろうと歩くのだが――。

「あ、あれ？」

帰路が解らない。どこをどう走って来たのか全く思い出せない。

「これはまずいかもっす。——クラウドス！」

オイラは既に顔面が綺麗すつきり治っているクラウドスを起き上がらせてどうやってここまで来たか道順を尋ねた。

しかし――。

「わかんない。僕もがむしゃらにれっくんを追い掛けて来たからクラウドスもオイラと同じく解らずじまい。」

——こ、これって。

「もしか、遭難した？」

「そうなん、だ」

「……………」

——わざとらしい！ 絶対わざと言ったなコイツ！ ニヘラニヘラと愛らしく笑ってるせいもあってか無性に腹が立つ！

オイラはもう一度爆炎掌を叩き込みたくなっただが、ここで怒っても仕方ないと必死に堪えた。

「とりあえず、ここでじつとしても仕方ないっすから、キャンプ場に戻る道を探そうっす」

「ハ〜イ、わかったあれっくん！」

「……………」

——何で返事がそんな楽しげなのこの人？

そう危機感の足りないクラウドを、ただオイラは啞然と眉をしかめて見据えるのだった。

それから――。

「はあ、はあ――お、おかしい！ おかしいっす！ なんで道路とかに出ないんすか！」

かれこれ二日間、オイラとクラウドは山の中を歩き続けるのだが、いつこうにキャンプ場に戻る気配はおるか、車が通る道路にすら辿りつく様子すら見せない。同じ道は通っていない。都会暮らしが長いとはいえ、山などで迷う程妖狐の野生の直感は鈍っていないはずなのに。慣れない山だからだろうか？

どちらにせよ、これはやばいな。キャンプ場においてきぼりにした彩は心配していないだろうか？

「ふふふ、れっくん。なんかこんなに長く一緒だと、二人の愛がより芽生えそうだね」

——オイラの心配を余所にコイツは！

「………… 芽生え無いっすよ」

——怒るのも疲れるし逆効果になりそうだ。オイラは出来るだけ

冷たく素っ気ない態度で言葉を返した。

「またまたあ、照れちゃって。可愛い。フッフ」

——照れてないよ！くそっ！結局これも逆効果だった。てゆーか、なんでコイツはこんな嬉しそうなもの？っと、いかんいかん。ここは無視だ。無視するに限る。

オイラははや歩きでクラウドから距離を放すが。

「あれ？れっくん。放置プレイかい？れっくんってけっこうSなんだね」

「なんでそうなるんすかあ！」

「でもそういうれっくんも好きだよ。とっても可愛いから」

駄目だ。結局コイツはオイラが何をしても喜ぶのだ。しかし、だからと言って諦めたらおしまいだ。

どうにかクラウドに諦めてもらわねばと歩きながら腕を組んで考えていたら、いきなりもの凄い突風が吹き荒れた。

「うわっ！」

あまりの突風に、オイラ達は飛ばされないように必死に踏み止まる。

「——風が止んだよ？」

「いったい今のはなんだったんすか？」

「はーはっはっはー！」

風が止みはじめたと同時に、どこからか高らかな笑い声が聞こえてきた。

「いったいどこから？——あ！」

オイラは眼で相手を捜し、そして捉えた。

笑い声の主は、太い木の上で偉そうに腕を組んでいる山伏の服装をした真っ白い長髯天狗だった。

「さっきの突風はあんたが巻き起こしたんすか？」

「そのとあーり！　わしはこの山の全てを護る大天狗。ミツルギである！」

外見らしいもつともな口調で大天狗ミツルギは肯定と言い張るとオイラ達を指差し。

「自然を汚す悪狐と悪魔め！　わしが、あ！　成なり敗やぶしてくれろうろ！」

何故か歌舞伎口調と動作でオイラ達に身に覚えの無い言い掛かりを付けた。

「ちよつと待つつすミツルギさん！　ただでさえ今、遭難しているオイラ達がいつ自然汚すような事をしたんすか！」

オイラが問い掛けると予想外の返答が返って来た。

「貴様らのBボイスLラフが、自然の生き物達に悪影響なのだあー！」

——　なんじゃそりゃあ！　明らかにどうでいい理由じゃないか！　てゆーか、明らかに根本的な誤解を招いているぞ！　まずオイラはそつちの趣味は無い！　百パーセントあんたの誤解だよこれは！　変な誤解で成敗されるなんてごめんだ。説得しなけば、オイラは温厚におうびんに済ませようとうかがい出た。

「ちよつと、ミツルギさん。オイラは男と付き合う趣味は無いっす、それはこの変態インキュバスが勝手に——」

「僕とれつくんの愛が——悪だと！　取り消せ！　汚らしい髭男！　僕とれつくんの愛はどんな汚れをも浄化する！　だから髭男！

明らかに君のは偏見だ！　判ったか糞髭男！」

——　コラー！　何悪化させかねない事を相手に指差してかつよく発言してんの！　しかもなにげに酷い文句言ってるしね。

あ、ミツルギがぶるぶる奮えている。明らかに怒っているよ。

「き、貴様らー！　わしの髭を馬鹿にするなあー！」

泣いているよ！　けっこうショックだったんだ髭を馬鹿にされたこと！　しかもオイラも馬鹿にしたやつに入れている！

ミツルギは情けない怒り声で叫ぶと、背中に背負っていた大きな団扇を取り出すと深々と振り上げた。

「吹き飛ばえーい！」

言い放つと共にミツルギはオイラ達目掛けて、勢いよく団扇を振り下ろす。

すると、とてつもなく激しい疾風が巻き起こる。

凄い風だ。周りの木がめきめき軋む音を立てて曲がりくねりへし折れ吹き飛んで行く。

「うわっ！」

オイラも踏み止まる事が出来ずに吹き飛ばされ、へし折れなかった太い大木に激突してしまった。

「あうっ！」

背中を強打したオイラは苦痛でうめき声を上げ大木に背もたれる形で腰を落とした。

「れっくん！」

心配そうにクラウドがオイラに駆け寄る。

呻くオイラを見て、クラウドはふるふると怒りに震えながら唇を噛み締める。

「れっくん——」

そしてきりりと鋭い目付きになりミツルギに振り向いて睨み据える。

奮える拳を胸まで上げるとびしりとミツルギをかつこよく指差してこう言った。

「貴様——！ よくもれっくんを殺したな——！」

「えっ！ 生きてるっすよ！」

——なんて事を言うんだコイツは！ せつかくただの変態じゃない格好いいやつと見直したと思ったらそれかい……。

「がはは」。貴様もすぐに死んだ悪狐の後を追わせてやるわ」

生きてるよ！ そんな高いところから見て普通に解るだろ！ 平然と立ってんだろオイラ！ どんだけ目が悪いんだよ！

「うおおお！ れっくんの仇——！」

「コラー！ 生きているっすよ！ 勝手に殺すな——！」

そう涙を流しながら角や牙がはえて蝙蝠の翼を展開させて本来の姿になるクラウス。オイラの声など聞こえてない様子で跳躍してミッルーギに紫色の魔弾を放つ。

「甘いわっ！」

ミッルーギは白い翼を広げ、魔弾を飛んで回避した。魔弾はミッルーギがいた木に直撃して爆発を起こした。

「食らえい！」

ミッルーギは団扇を振り上げたまま素早くクラウスを下駄をはいた足で蹴り飛ばし、団扇を振り下ろす。

蹴り飛ばされたクラウスは更に強風の力も加わり、勢いよく地面に激突する。普通なら即死だが、クラウスは高い再生能力があるからしぶとい。

「くう、痛たた」

案の定、クラウスは平然と立ち上がった。

「フフフ、やりおるな。だが、次の一撃で終りにしてやる」

そう言うミッルーギはいままで以上に団扇を大きく振り上げた。多分最大の風を喰らわせる気だ。

「ってストップ！ そんな事したら自然がめちゃくちゃになっちゃうっすよ」

「ヒハハハ！ 死ねえい！」

——駄目だ聞く耳持たずと言うか周りが見えていない！

仕方ない、あんまりこの姿になるのはあまりに危険だからならなかったが、背に腹はかえられない！

そうと決まればオイラは妖狐の姿に戻った。

「な、なんじゃあこの妖気と巨体はー！」

うゝ相変わらず巨体故か山でも窮屈だ。しかし何にしてもだ。先ずはミッルーギを止めねば。

「悪いけど、少し痛い目にあってもらうつす！」

オイラは口から炎を吐き出した。

そして次の瞬間には、大天狗の悲鳴が山中に響いたのだった。

——後日。

都会にどうにか帰って来たオイラだったが、クラウドは未だにオイラから離れないでいた。それどころか、大天狗を止めたのが自分を助けたと勘違いして余計にオイラに惚れてしまったのだった。

「はあ……クラウド。頼むからついて来ないでっす。あんたといるとろくな事が起きないっす」

「大丈夫だよれっくん。どんな障害があろうと僕達の愛は何だって乗り切れるさあ」

「はあ」

全く理解してないクラウドに、オイラは溜息を漏らすしかなかった。

「にしても……。オイラ何か忘れてるような……あっ！」

——彩を忘れてた！

キャンプ場から離れた山奥。

「烈狐丸様〜！」

服装がボロボロになりながらもオイラを捜す彩の姿があった。

「う〜。いったいどこにいったんですかあ。烈狐丸様あ〜！」

彩がオイラはとづくに都会に帰ったのを知ったのは一週間後にミッルーギに出会った時だったと言っ。

終

（後書き）

どうも、一月ぶりの参加です。てゆうか、マジですみませんテーマ小説使ってシリーズ短編出すの。自分の執筆や限られた文字制限を纏める為の向上目的もかねてやらせてもらってます。楽しんでもらえた方々には感謝。迷惑だと思われた方々には謝罪の言葉でいっぱいです。では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2178c/>

変態インキュバスに憂鬱

2010年10月8日14時23分発行